

白雲片片

第十一回

大尊貴生

今回は北巖明哲禪師、洞山良价禪師、
神山僧密禪師が登場する古則を紹介致します。

正法眼藏三百則 第二百二十則
『鄂州北巖明哲和尚、因みに洞山、密師伯と到る。師問う、二禪衲、甚れの処よりか来れる。山云く、湖南。師云く、觀察使の姓は什麼ぞ。山云く、姓を得ず。』

師云く、名は什麼ぞ。山云く、名を得ず。師云く、還た事を理すや不や。山云く、自ずから廊幕の有る在り。師云く、還た出入すや。山云く、出入せず。師云く、豈に出入せざらんや。山、払袖して出で去る。師、明日、晨を侵して堂に入る。二上座を召し近前せしめて云く、昨日、二上座に問いし話、老僧の意に慚わず、一夜不安なりき、今請う、上座、別に一転語せよ。若し老僧が意に慚わば、便ち粥を開いて相い伴に夏を過ごさん。山云く、請う、和尚問え。師云く、豈に出入せざらんや。山云く、大尊貴生。師、乃ち粥を開いて夏を過ごす。』

現代語訳／「師」は北巖明哲禪師、「山」は洞山良价禪師。※原文に出てくる「觀察使」というのは昔の中国の役人で、地

方を巡って政治がきちんに行われているかどうかを觀察する職の名前です。当時、寺院も觀察使に監督されていたようです。また、「湖南」というのは、中国にある洞庭湖という湖の南側の地方です。

昔、中国の鄂州という所にいた北巖明哲禪師を、洞山良价禪師と神山僧密禪師が尋ねた時の話です。

師「お前たちはどこから来たのか。」

山「湖南の地方から参りました。」

師「その地方の觀察使の姓は何だ。」

山「存じません。」

師「では、名は何だ。」

山「いや、それも存じません。」

師「その觀察使は、きちんと仕事をして

いるのか。」

山「自分たちとその觀察使との間には幕

がかかっているようなもので、觀察使がどういう様子かよく分かりません。」

師「その幕を通して出入り（觀察使と関係）することはできるか。」

山「いや、出入りは致しません（觀察使と往来することはございません）。」

師「なぜ出入りしないのか（なぜ觀察使と行き来しないのか）。」

山「なぜ出入りしないのか（なぜ觀察使と行き来しないのか）。」

師「なぜ出入りしないのか（なぜ觀察使と行き来しないのか）。」

山「なぜ出入りしないのか（なぜ觀察使と行き来しないのか）。」

師「なぜ出入りしないのか（なぜ觀察使と行き来しないのか）。」

山「なぜ出入りしないのか（なぜ觀察使と行き来しないのか）。」

